

社会の流動性に応じた人間関係の同質性・異質性

——個人単位および社会単位の人間関係に着目した地域社会調査——

○東京女子大学 福島 慎太郎

日本女子大学 石黒 格

1 目的

本研究の目的は、人間関係の同質性・異質性の現状を個人および社会の双方の単位から探ることにある。グローバル化に伴い、異質な他者と関わり合う機会が増大している。しかしながら、従来の地縁・血縁に基づいた伝統的な共同体から離れて形成される人々の関係は、逆に同質化していることが提示されている (e.g. Fischer, 1972)。その背景にあるプロセスは同類性原理 (人々が似たもの同士で結びつく傾向) である。Fischer は、この原理に基づいた同類結合が、都市における人々の選択可能性に伴い生じるという「下位文化理論」を提唱し、実際にこの理論が実証的に検証されてきた。一方で、日本社会においては、この下位文化理論を検証した結果は必ずしも一様ではない。その一因として、同類結合が成立するプロセスは、必ずしも個々人の人間関係の選択 (ミクロなプロセス) のみに由来すると仮定できないことが挙げられる。より明確には、以下のように予測する。都市度が低い (故にミクロな選択的結合が優勢ではない) 地域においても、新規に流入する他者が少ない安定した社会環境では、地域住民が共有経験および相互の社会的学習を通して同類的になる可能性がある。このとき、都市度の低い地域内部のローカルな人間関係は、結果としてマクロな意味で同類となる傾向があると予測される。このように考えれば、日本社会において都市度と同類結合の関係が明確ではないことの説明がつく。以上の予測を実証的に検証することが、本研究の目的である。

2 方法

研究の目的を達成するために、本研究は社会の流動性に着目する。日本の伝統的な地域社会で仮定されるマクロな同類結合プロセスを支える要因として、内部構成員の安定した (流動性が低い) 人間関係が想定されるためである。このことを踏まえ、本研究では社会の流動性に応じた地域社会群に対する郵送式の質問紙調査を行った。具体的には、住民の住居流動性 (居住年数の長短) に応じて、多段抽出法を用いた地域社会群の抽出を行った。1 段目で住居流動性が相対的に大きい東京都を選定し、2 段目で流動性が大きい中央区、流動性が小さい奥多摩町、流動性が中程度の狛江市を抽出した。そして 3 段目で、各市区町村の代表的な (住居流動性の中央値による) の小地域 (N=19) を抽出した。これら小地域群の全世帯 (N=6,631) に対して質問紙を郵送し、715 世帯から回答を得た。マクロおよびミクロの人間関係の同質性を測定する項目として、それぞれ小地域社会 (町内/集落) 全体の価値観の類似性に対する認知、回答者個人の親密な相手との価値観の類似性に対する認知を測定する項目を設けた。これら項目に加え、個々人の住居流動性を把握するための居住年数を測定した。

3 結果と結論

分析の結果、地域社会の住居流動性が高い中央区においては、相対的に個人単位の人間関係の同質性が形成されていた。一方で、地域社会の住居流動性が低い奥多摩町においては、相対的に小地域 (町内/集落) 単位の人間関係の同質性が形成されていた。地域社会の住居流動性が中程度の狛江市は、中央区と奥多摩町の中間の結果が得られた。また、奥多摩町においては、居住年数が短い住民の方が長い住民よりも、個人単位の人間関係の同質性が高いことが確認された。以上、日本においては流動性が高い地域社会においては個人単位のミクロな人間関係の同質性が、流動性が低い地域社会においては社会単位のマクロな人間関係の同質性が形成されるという、社会の流動性に応じた異なる単位の同類結合プロセスが生じる可能性が示唆された。

文献

Fischer, C. S., 1972, "Urbanism as a Way of Life: A Review and an Agenda". *Sociological Methods & Research*, 1(2), 187-242.